

農家父兄・生徒の農業意識と進路指導

村山良彦*

この研究は、農家の父兄・生徒が、揺れ動く農業政策のなかで農業に対してどのような意識をもっているか、その実態を明らかにするための調査と、農業後継問題について親子間の意識の異なる生徒の指導事例である。調査によれば、農業の将来性については父兄・生徒ともに強い不安感をもっており、農業後継希望の生徒数も父兄の希望を下回っているなど農業に対する魅力がうすく、農村中学生の進路指導に困難な問題のあることを示唆している。

はじめに

社会状況が変化し、今まで保護政策がとられていた米価が社会問題となり、減反という形でさがれている。この社会の動きの中で、農家の父兄は、この問題をどのようにうけとめているのか、生徒の意識はどのようなのか、進路指導をあずかるものとして、その実態をは握しておく必要がある。

政策の変更が、複雑多岐な問題をかかえて、農業構造の改善をせまられているいま、地域教育構造への影響の大きいことは当然である。減反問題がおこってから、高校農業科の受験希望者は、全国的に減少している。また、農業に対する将来への不安をかかえている農業従事者も多い。農林省の46年度の調査によると、農家数の減少が目だってきている。特に専業農家が減少しており、兼業農家の増加という形が特徴となっている。恵まれないへき地においては、農業に対する不安から、離村、離農も増加の傾向にある。また、農家労働力を見ると、農業就業者の高齢化が進み、今後の農業経営者の育成という観点から、大きな問題となると考えられている。

次代をにう若者が、どのように農業を考えているのか、特に農業県といわれる本県にとっては、この社会の急激な変ほうとのかかわりあいにおいて、教育現場でのきめこまかな配慮が必要であり、農業従事父兄、生徒の意識の実態をつかみ、真剣に取り組まなければならない課題ではないだろうか。

I 農家父兄・生徒の農業意識の実態

1 調査目的

農業政策の変更が、地域教育におよぼす影響が大きいと考えられるなかで、はたして、農家父兄・生徒は、農業に対してどのような意識をもっているのか、実態をは握して進路相談を実施するための参考資料としたい。

* 岩船郡朝日村立猿沢中学校教諭

2 調査の方法

質問紙法により、農家父兄・生徒に調査用紙を配布し、回答をもとめた。なお、調査項目は生徒・父兄に一部同様のものを実施し、生徒・父兄間の違いを調べるようにした。

3 調査の対象

岩船郡内の平場といわれる米作地域と、水田などが少ない出稼ぎの多いへき地とを、調査対象として選んだ。なお、生徒については、質問
(表1) 調査対象
(S46年6月実施)

	生徒男子	生徒女子	農家父兄	計
へき地	31	25	46	102
平場	58	55	87	200

4 調査結果の概要

(1) 農業の将来性について

進路選択をするうえで、職業の将来性があるかということは、進路を決定するうえで、大きく左右する因子といわれている。保護政策がくずれ、減反問題としてマスコミにさわがれている現在、農家父兄・生徒は、どのように考えているかを調査した結果が表2である。この表からもわかるように、大い

(表2) 将来性について (%)

	へき地			平場		
	男子	女子	父兄	男子	女子	父兄
大いにある	16.1	8.0	13.1	8.6	1.8	9.2
ある方	38.7	32.0	52.1	37.9	40.0	52.0
ない方	45.2	60.0	28.3	46.6	54.6	26.4
全くない	—	—	2.2	6.9	3.6	3.5
無答	—	—	4.2	—	—	8.0

に将来性があると考えている人は少ない。特に注目すべきことは「将来性がない方」と答えている生徒が45～60%をしめているのに対して、父兄は26～28%と、生徒との間に大きな差があることである。父兄の約30%が「将来性が全くない」

「ない方」と答えているということは、やはり農業に対する不安が潜んでいると思われる。

(2) 農業に対する興味

中学生の場合、田植、稲刈りを手伝い、また、毎日の父兄の姿をみて、生徒は農業に対してどのような意識をもっているか、単純な質問ではあるが、農業はおもしろいかどうかという項目で調査した。進路を決定しなければならない岐路に立っている時期における興味は、やはり欠くことのできない問題である。

(表3) 興味について (%)

	へき地			平場		
	男子	女子	父兄	男子	女子	父兄
大いにある	9.7	—	13.1	3.5	—	5.8
ある方	29.0	32.0	65.2	31.0	32.7	68.9
ない方	58.1	68.0	13.1	62.0	65.5	16.0
全くない	3.2	—	2.2	3.5	1.8	3.5
無答	—	—	6.5	—	—	5.8

地域差はたいしてみられないが、生徒・父兄間に大きな差がみられる。「大いにおもしろい」「おもしろい」と答えている父兄は75～78%の高い率をしめているのに対して、生徒の多くは、農業は苦労ばかり多いとか、泥まみれの仕事であるというような意識が働いている。

(3) 仕事のやりがい

やりたくもない職業を毎日のように続けているのと、この職業はたいせつな職業であると自分自身が感じながら続けているのとでは、大きな差がある。やはり生徒が、職業を選択する場合、やりがいのある職業かどうかという意識も選択条件として重視されている。調査の結果によると、へき地、平場で、差はあまりみられず、やりがいをみとめている父兄78%、生徒56~74%と高い率をしめている。

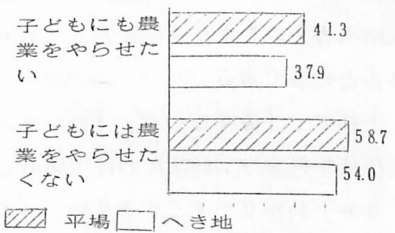
(表4) やりがいについて (%)

	へき地			平 場		
	男子	女子	父兄	男子	女子	父兄
大いにある	12.9	12.0	23.9	10.3	3.5	10.3
ある方	51.6	44.0	54.4	53.5	70.9	66.6
ない方	32.3	44.0	15.2	31.0	25.6	18.5
全くない	3.2	—	2.2	5.2	—	2.3
無 答	—	—	4.3	—	—	2.3

(4) 父兄の子どもへの農業継続の意志

父兄の75%は今後とも農業を継続していきたいと答えている。専業農家の場合その理由は、いまさら農業をやめられないという理由が多い。それに対して、兼業農家の場合は、現在の物価高から自家米だけでも、今後とも続けたいという理由である。このような父兄が、はたしてどれだけ自分の子どもに対して、農業をさせたいと考えているかという、子どもに農業をやらせたいという父兄41.3%で「水田があるから」「たいせつな職業だから」という理由が、70%をしめ、「将来性があるから」と答えている父兄は10%にみえない。

(図1) 父兄の意志 (%)

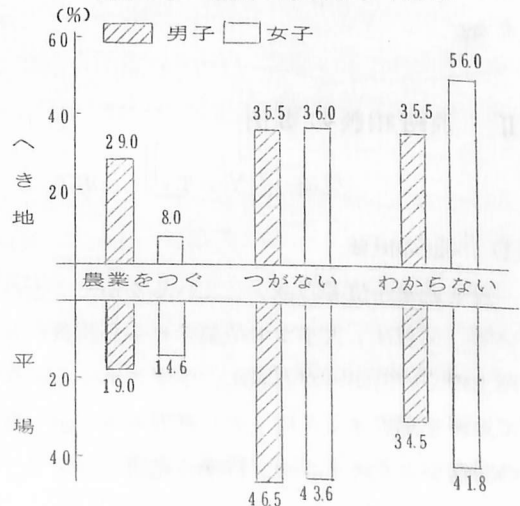


それに対して、子どもに農業をやらせたくないと答えている父兄の理由は「これからの農業を考えた場合、現在もっている水田が少ないから」と答えている父兄が47%、また、「農業の将来性、収入を考えて」という父兄が35%を占めている。このようなことから父兄自身が農業に対して不安、疑問をもっているということがいえるのではないだろうか。

(5) 生徒の農業をつぐ意志

最近の農業は、兼業化、機械化が進み、しかも、農業就業者の高齢化が著しいといわれ、農業経営者の育成という点から、大きな社会問題ともなっている。このような情勢のなかで、農業につきたいと思っている生徒がどの程度いるのか調べてみた。どんな職業にあこがれているかという問いに対して、専門的技術的な農業技術者になりたいと希望する生徒は、女子にはなく、男子3%、作業者として農耕、養畜を希望する生徒は1名も存在しなかった。しかし、自分の能力、適性、家庭事情を考えて、つきたい職業を記入させたところ「専門的な農業技術者になりたい」と答えた生徒は男子1名、「農耕、養畜作業者になりたい」と答えた生徒は男子3%、女子1

(図2) 生徒の農業をつぐ意志



の少数で、生徒にとって、農業という職業は、自分から進んでやりたい職業でないことがはっきりとわかる。また、生徒の進路を決定するとき、家族の意見が大きく作用することを常に経験しているが、どのように答えるか、次のような項目を作ってみた。男女、長男、家の跡継ぎなど関係なく、「あなたは、家族が農業をつぐように話をしたら農業をつぎますか」の問いに対して、その結果が、(図2)である。農業をつぐと答えた生徒は、男子に多く、全生徒の約18%が、農業をつぐと答えている。また、「そのときにならないとわからない」と答えた生徒が多くいるということは、やはり、進路を決定するとき、家族の意志を無視できないということが、はっきりといえる。それにしても、子どもに農業をやらせたいとする父兄との間に、大きな差があり、今後、ますます、農業就業者が社会問題になると考えられる。

(6) 生徒の進路選択と将来性、興味の関係

生徒が進路を選ぶ場合、家族の意見に従うことが多いことは、上記の調査から明確である。その時、自分自身の意志を無視して盲目的に家族の意見に従うのか、また、生徒自身が、ある程度将来性、興味等に関心があって選ぶのか、進路指導をおこなうものにとって、大いに興味あるところである。

それで、「農業をつぐ」「つがない」と答えた生徒を将来性、興味にわけて集計した。

なお、わかりやすくするため、「大いにある」2点、「ある方」1点、「ない方」-1点、

「全くない」-2点を与え、これをパーセントに乗じて関係をみた。この結果から、やはり、進路を決定する場合、家族の意見に従っている生徒は、将来性、興味ともに認めている生徒が多いということである。

(表5) 農業の将来性 (%)

	農業をつぐ		農業をつがない	
	平 場	へき地	平 場	へき地
大いにある	15.8	36.4	—	5.0
あ る 方	52.6	36.4	41.2	25.0
な い 方	26.3	27.2	52.9	70.0
全 く ない	5.3	—	5.9	—
得 点	+52.6	+82.0	-23.5	-35.0

(表6) 農業の興味 (%)

	農業をつぐ		農業をつがない	
	平 場	へき地	平 場	へき地
大いにある	10.5	18.2	—	—
あ る 方	47.4	45.4	25.5	25.0
な い 方	42.1	36.4	72.5	70.0
全 く ない	—	—	2.0	5.0
得 点	+26.3	+45.4	-51.0	-55.0

II 進路相談の事例

生徒 Y・T・ 男子 (中学校 第3学年)

(1) 問題の概要

農業就業希望者の減少しているなかで、この生徒は、農業高校を卒業して農業をやることを希望している。父親は、大学まで卒業させ、公務員か大企業に就職させることを夢み、生徒と父兄との間に、進路上のくいちがいがあった。中学3年生というまだ未熟な年代の生徒が、将来の見通しをたて、計画的に進路を選択するには、少し無理もあるが、自分の問題として、能力、適性、興味、家庭事情等、種々の問題をよく考えさせ、将来の見通しをたて、少しでも計画的に進路を選択させる必要がある。以上のことから、進路相談を実施した。

(2) 本人の現況

(ア) 学習 学習態度も真面目で、積極的に学習し、努力する方である。学校内の成績は5段階評価で4.5である。

(イ) 学活 1年生のときより学級、生徒会の中心的な立場につき、活躍している。特に運動能力にすぐれ、各種陸上競技大会で入賞している。

(ウ) 性格 仕事などでも黙々と一人で実行する方で、自分の感情をあまり表面にあらわすことは少ない。それでいて、ユーモアもあり、言動、行動ともに慎重な方である。真面目な性格なので、学友からの信頼も厚く、学級、生徒会で、いつも一番たいせつな役割をおわされている。

(エ) 標準検査 昭和45年5月実施 教研式知能検査 偏差値 57
昭和45年6月実施 職業適性検査 知能 言動 指先 手腕 (B)
数理 空間 C
書記 形態 共応 C

(3) 家庭環境

(ア) 家族構成

父	39才	尋常小学校卒業	建築大工
母	38才	尋常小学校卒業	農業
妹	13才	中学校	1年生

(イ) 家庭状況

生活は中程度である。しかし、水田6反、畑8畝と少ないため、父親は出稼ぎに行き、母親は農業よりも、土木関係の仕事をおもにしている。

(4) 進路相談の経過

<3年生4月までの経過>

生徒……生徒の話した内容を記入する。

教師……教師の感想、思ったことを記入する。

生徒 中学に入学してから、毎日のように朝、農業関係のテレビを見ているうちに、将来農業をやりたいと考えるようになった。自分は、物を作ったり、栽培したりするのが好きである。

教師 将来の職業として、できれば農業をやりたいと考えているようだが、農業とはどのようなものなのか、深く考えているわけでもなく、なんとなく好きということで計画的なものはない。

<3年生6月>

生徒 将来は農業をやりたい。自分の家は水田が少ないので、父母ともに農業をやることには反対している。減反とか、さまざまなことがいわれているが、経営の方法によっては大いに将来性があると思う。農業高校に進学して勉強すれば、その方法もわかると思う。父母は普通高校に進学させたいといい、自分を理解してくれない。田植えは、自分の家だけでなく近所も手伝いに行った。苦しかったがいやではなかった。サラリーマンのように人に使われるより、自分で農業をやっていく方がどんなに楽しいかわからない。

教師 母親とは時々将来のことを話し合っているらしいが、母親と意見があわず、困っているようすである。農業高校に行きたいといいながら、農業高校ではどのようなことを教えるのか

ばく然とした知識しか持っていない。

<3年生9月>

生徒 農業高校に行っている人に、さまざま農業高校のことについて聞いた。自分はハウス栽培をやりたい。母親は、納得できるだけの計画をたてれば賛成するといったが、父親は、農業は将来性もないし、苦勞するわりに収入も少ない。それよりも大学にはいって大企業に就職するか、公務員になるようにいい、就職口の少ない田舎にいるよりも、父親は、関東方面に引越していくことを考えようと話している。もしも、関東方面に行っても農業関係の仕事をやりたいと話したが、父親は土地も高いので無理だといっている。

教師 父親の引越しの話と、父親の反対で、農業をやることについて不安なようすである。どうしてもハウス栽培をやりたい、農業高校だけでじゅうぶんであると話していたが、相談が進むにしたがって、大学を卒業して専門的な園芸をやりたいようすに変わってくる。

<3年生10月>

生徒 農業をやりたい気持ちは変わらないが、大学を出て専門的な園芸を研究したい。農業高校から研究しながら大学にはいることも考えたが、普通高校からの方が大学にはいりやすいので普通高校に行くことにした。父親とはまだ話し合っていないが、母親は賛成してくれた。農業、大学についてこれからよく調べたい。

教師 将来に対する意識もできてきたようである。母親と意見が一致し安心したようすである。しかし、父親にどのように話そうか、迷っているようすもみられる。

(5) 経過の反省

上記のものは、相談の一部であり、まだ複雑な問題があり相談がこれで終わったわけではない。この生徒は、他の生徒にくらべ、計画性を持っていた生徒である。しかし、ほんとうに将来を深く考えていたかという疑問がある。この生徒は、毎日、農業のテレビを見なければ農業をやる気持ちにならなかっただろう。また、教師と話し合わなければ専門的な園芸をやりたいといわなかっただろう。農業がほんとうにこの生徒の進むべき道なのか、生徒は不じゅうぶんな情報と知識で、しかも表面的な理解だけで職業を選択しているのではないだろうか。相談はこれでよかったのか、今後進路が変わると思うが、教師として、どのように援助してやればよいのか、大いに問題のあるところである。

お わ り に

農業は、生徒にとって自分から進んでやりたい職業ではない。しかし、家族の意見によって農業をやるということである。また、自分の意志を無視して、家族の意見に従っているのではなく、多くは生徒なりに将来などを考えているということである。相談をとおして知ったことは、生徒なりに考えているが、現実になってじゅうぶんに考えている生徒が少ないことである。現在のように、職業も多種多様になり職種そのものが職業によっては変化している社会のなかで、将来の見通しをたて、計画的に進路を選択するには、中学生ではまだ未熟な年代ではないだろうか。人生の岐路にたつ生徒の可能性をみいだす進路指導は、どうすればよいのか研究すべき課題ではないだろうか。